

木曾地域の高校の将来像についての
意見・提案書

令和2年(2020年)12月22日

木曾地域の高校の将来像を考える協議会

目 次

はじめに

1 木曾地域の高校の状況について

(1) 経 過

(2) 学科の設置状況

(3) 中学生の高校進学状況

(4) 郡内中学校卒業生の志望調査数と進学者数

(5) 高校の入学状況

(6) 高校卒業生の進路状況

(7) 中学卒業生数の推計

(8) 高校の現状と課題について

(9) 県教育委員会実施方針より

2 木曾地域の高校の将来像に向けた意見・提案

(1) 木曾地域に望まれる「学びのあり方」について

(2) 木曾地域の魅力ある「高校の姿」について

おわりに

〈資料〉

I 木曾地域の高校の将来像を考える協議会 設置要綱

II 協議会での検討経過

III 協議会委員名簿

はじめに

今、木曽地域は急速な過疎化、少子高齢化の中にあり、地域社会は多くの課題を抱えています。

「木曽地域の高校の将来像を考える協議会」（以下「協議会」という。）では、木曽地域の高校の将来像について、平成 31 年（2019 年）1 月の協議会設立以来、約 1 年半にわたり協議を重ねてきました。

平成 30 年（2018 年）9 月に発表された長野県教育委員会の「高校改革～夢に挑戦する学び～実施方針」において、新たな学びの推進と再編・整備計画の二つの大きな柱が示されました。

私たちの住む木曽地域（旧第 10 通学区）においては「再編の実施を前提とした」という表現を用いない形での方向ですが、厳しい少子化の現実と向き合いつつ、地域全体の高校の将来像についての検討は、大変難しいものでした。

協議会では、地域の関係者（保護者や同窓会、産業界等）の皆さんの声もお聴きしながら、協議会として意見交換を重ね、木曽地域としての意見の集約に取り組んできました。

お互いの意見を聴きあう中で、新たな共通理解・認識が生まれたことは有意義であったと考えます。

協議会としては、現在の木曽青峰高校と蘇南高校の 2 校がさらに魅力ある学校となり、地域人材の育成、地域活性化の核となる学びの場として輝き続けることを願いつつ、ここに木曽地域の高校の学びのあり方等について意見・提案します。

1 木曾地域の高校の状況について

(1) 経 過

木曾地域では、平成2年(1990年)に663人であった中学校卒業生数が、平成20年(2008年)には323人まで減少し、学校規模の適正化が必要な状況になった。

木曾青峰高校は、「第1期長野県高等学校再編計画」の公表時には、木曾西高校と木曾東高校が統合し発足した木曾高校と、木曾山林高校が統合され、木曾青峰高校として開校していた。2度の統合を経て、普通科、理数科、森林環境科、インテリア科の4科をもつ普職併設の全日制となった。また、木曾東高校時代の昭和23年に開設された定時制普通科も存続し、統合から14年目を迎えている。

木曾地域の急激な少子化を背景に、平成27年(2015年)に普通科が2クラスから1クラス募集となり、普通科、理数科、森林環境科、インテリア科が各1クラスとなった。その結果、専門学科の募集定員比率が上がることとなった。

ここ数年、木曾郡内の中学生の第1回志望校調査では、木曾青峰高校の普通科志望が定数を超える状況が続いている。

中学生の時期に将来の職種を見越した進路選択が難しい生徒もおり、普通科志望が多いものの、募集定員の制約から専門学科や他校への志望変更を余儀なくされている生徒がいることも事実である。

蘇南高校は、「第1期長野県高等学校再編計画」検討時は、普通科、電気科、商業科の3学科が各1学級募集となっていたが、その後の生徒数の見通しから2学級募集としていくことはやむを得ないと考えられ、これまでの学科の特色を残し、生徒の学習や進路に対する希望に応える方向で検討が進められた。

その結果、蘇南高校においては地域の要望を踏まえ、入学後にキャリア学習を重ねながら自分の専門を選択していく3系列の総合学科を設置し、地域の高校教育を担う学校づくりを進め、現在11年目を迎えている。

木曾谷南部の生活圏が県境を越えていることから、蘇南高校への岐阜県からの越境入学者も少なくない。長野県と岐阜県の両教育委員会は、南木曾中学校・大桑中学校と中津川市内の一部の中学校の生徒について、一定の条件の下で越県して進学できる取り決めを結んでいる。現在は、木曾郡内から中津川市に進学する生徒よりも、中津川市から木曾郡内に進学する生徒の方が圧倒的に多い。

(2) 学科の設置状況

- | | | |
|----------|-----|----------------------|
| ① 木曾青峰高校 | 全日制 | 普通科・理数科・森林環境科・インテリア科 |
| | 定時制 | 普通科 |
| ② 蘇南高校 | 全日制 | 総合学科 |

(3) 中学生の高校進学状況

(単位：人)									
			木祖村	木曽町	王滝村	上松町	大桑村	南木曽町	合計
H 29 年	木曽青峰高校	普通科	6	22	0	3	4	3	38
		理数科	4	13	1	6	8	2	34
		森林環境科	3	11	1	6	5	3	29
		インテリア科	3	14	0	6	3	1	27
		定時制	0	1	0	0	3	0	4
		合計	16	61	2	21	23	9	132
	蘇南高校	総合学科	2	12	1	7	10	15	47
	郡内計		18	73	3	28	33	24	179
郡外計		2	9	1	5	3	11	31	
卒業生数		20	82	4	33	36	35	210	
郡内高校への進学割合		90.0%	89.0%	75.0%	84.8%	91.7%	68.6%	85.2%	
H 30 年	木曽青峰高校	普通科	0	26	1	4	1	3	35
		理数科	4	23	0	3	4	1	35
		森林環境科	0	15	0	4	4	0	23
		インテリア科	2	21	1	7	4	1	36
		定時制	0	2	0	0	0	0	2
		合計	6	87	2	18	13	5	131
	蘇南高校	総合学科	3	5	1	4	8	18	39
	郡内計		9	92	3	22	21	23	170
郡外計		6	17	0	8	6	7	44	
卒業生数		15	109	3	30	27	30	214	
郡内高校への進学割合		60.0%	84.4%	100.0%	73.3%	77.8%	76.7%	79.4%	
H 31 年	木曽青峰高校	普通科	3	17	1	4	5	2	32
		理数科	1	13	1	6	3	2	26
		森林環境科	0	10	1	9	4	0	24
		インテリア科	2	11	1	5	4	1	24
		定時制	0	1	0	0	1	0	2
		合計	6	52	4	24	17	5	108
	蘇南高校	総合学科	3	2	0	1	16	9	31
	郡内計		9	54	4	25	33	14	139
郡外計		12	23	2	12	6	9	64	
卒業生数		21	77	6	37	39	23	203	
郡内高校への進学割合		42.9%	70.1%	66.7%	67.6%	84.6%	60.9%	68.5%	
R 2 年	木曽青峰高校	普通科	6	24	0	3	6	0	39
		理数科	1	12	2	7	3	3	28
		森林環境科	3	14	1	5	1	2	26
		インテリア科	2	9	1	5	3	1	21
		定時制	0	1	0	1	1	2	5
		合計	12	60	4	21	14	8	119
	蘇南高校	総合学科	2	7	0	6	12	21	48
	郡内計		14	67	4	27	26	29	167
郡外計		7	16	2	6	1	14	46	
卒業生数		21	83	6	33	27	43	213	
郡内高校への進学割合		66.7%	80.7%	66.7%	81.8%	96.3%	67.4%	78.4%	

○郡内中学生が木曽青峰高校、蘇南高校に進学する割合は、4年間平均で77.8%である。

○郡内北部及び南部の生徒が木曽郡外へ進学する割合が高い。

○31年は、卒業生の3割以上が木曽郡外へ進学している。理由として最も多かったものは「大学進学実績のある高校をめざすため」であり、次いで「スポーツを継続するため」であった。

(4) 郡内中学校卒業生の志望調査数と進学者数

		※志望調査数は木曾郡進路指導委員会の調査による								(単位:人)
卒業生総数			進学先(高等学校名)							合計
			木曾青峰高校					蘇南高校	郡外他	
			普通	理数	森林	インテ	定時	総合		
		定員	40	40	40	40		80		
平成29年	210	第1回志望調査	69	16	25	22	4	38	36	210
		最終進学者数	38	34	29	27	4	47	31	210
平成30年	214	第1回志望調査	64	28	25	24	0	26	47	214
		最終進学者数	35	35	23	36	2	39	44	214
平成31年	203	第1回志望調査	48	24	24	16	3	25	63	203
		最終進学者数	30	27	24	24	2	32	64	203
令和2年	213	第1回志望調査	47	20	28	17	5	37	59	213
		最終進学者数	39	28	26	21	5	48	46	213

- 第1回志望調査における木曾青峰高校普通科志望者数は、平成29年・30年は最終進学者数の2倍近くになっており、直近2年間は1.5倍程度となっている。
- 木曾青峰高校普通科志望者の内の多くは、理数科、インテリア科及び蘇南高校へ進路変更していると考えられる。
- 毎年35名以上(ほぼ一クラス分)の生徒が、郡外高校へ進学している。特に平成31年は64名(全体の31.5%)の生徒が郡外等へ進学している。

(5) 高校の入学状況

						(単位：人)
			郡内中学校出身者	郡外中学校出身者	合計	郡内出身者割合
H 29 年	木曾青峰高校	普通科	38	1	39	97.4%
		理数科	34	3	37	91.9%
		森林環境科	29	6	35	82.9%
		インテリア科	27	8	35	77.1%
		定時制	4	0	4	100.0%
		合計	132	18	150	88.0%
	蘇南高校	総合学科	47	27	74	63.5%
H 30 年	木曾青峰高校	普通科	35	3	38	92.1%
		理数科	35	5	40	87.5%
		森林環境科	23	9	32	71.9%
		インテリア科	36	4	40	90.0%
		定時制	2	0	2	100.0%
		合計	131	21	152	86.2%
	蘇南高校	総合学科	39	30	69	56.5%
H 31 年	木曾青峰高校	普通科	32	2	34	94.1%
		理数科	26	1	27	96.3%
		森林環境科	24	10	34	70.6%
		インテリア科	24	5	29	82.8%
		定時制	2	0	2	100.0%
		合計	108	18	126	85.7%
	蘇南高校	総合学科	31	20	51	60.8%
R 2 年	木曾青峰高校	普通科	39	1	40	97.5%
		理数科	28	6	34	82.4%
		森林環境科	26	7	33	78.8%
		インテリア科	21	6	27	77.8%
		定時制	5	0	5	100.0%
		合計	119	20	139	85.6%
	蘇南高校	総合学科	48	22	70	68.6%

○木曾青峰高校入学者のうち、郡内中学校出身者の割合は、4年間平均で86.3%となっている。

○蘇南高校入学者のうち、郡内中学校出身者の割合は、4年間平均で62.3%となっている。

○木曾青峰高校普通科入学者は、郡内中学校出身者の割合が毎年90%以上となっている。その他の学科の郡内中学校出身者の割合は年によりバラツキがある。

○ここ数年は、多くの学科（含む総合学科）で定員割れの状況となっている。

(6) 高校卒業生の進路状況

①木曽青峰高校

平成29年3月卒業生									(単位：人)
進 学	4年制大学		短期大学		専門学校等		合計		
	61		10		51		122		
	県内	県外	県内	県外	県内	県外	県内	県外	
	7	54	4	6	26	25	37	85	
就 職	木曽管内		県内		県外		合計		
	19		13		10		42		
未定・進学準備等							5		
卒業生数							169		
平成30年3月卒業生									(単位：人)
進 学	4年制大学		短期大学		専門学校等		合計		
	67		11		40		118		
	県内	県外	県内	県外	県内	県外	県内	県外	
	10	57	6	5	20	20	36	82	
就 職	木曽管内		県内		県外		合計		
	12		8		5		25		
未定・進学準備等							5		
卒業生数							148		
平成31年3月卒業生									(単位：人)
進 学	4年制大学		短期大学		専門学校等		合計		
	45		8		51		104		
	県内	県外	県内	県外	県内	県外	県内	県外	
	13	32	3	5	24	27	40	64	
就 職	木曽管内		県内		県外		合計		
	16		8		8		32		
未定・進学準備等							6		
卒業生数							142		
令和2年3月卒業生									(単位：人)
進 学	4年制大学		短期大学		専門学校等		合計		
	49		13		46		108		
	県内	県外	県内	県外	県内	県外	県内	県外	
	12	37	4	9	24	22	40	68	
就 職	木曽管内		県内		県外		合計		
	10		9		5		24		
未定・進学準備等							11		
卒業生数							143		

○卒業生の内 75%前後が進学し、その内 50%前後が4年制大学に進学している。

県内に4年制大学が増えているため、県内への進学者は増加傾向にある。

○就職者は卒業生の内 20%前後で推移している。

②蘇南高校

平成29年3月卒業生									(単位：人)	
進 学	4年制大学		短期大学		専門学校等		合計			
	15		6		7		28			
	県内	県外	県内	県外	県内	県外	県内	県外		
	3	12	4	2	4	3	11	17		
就 職	木曾管内		県内		県外		合計			
	4		4		15		23			
未定・進学準備等							0			
卒業生数							51			
平成30年3月卒業生									(単位：人)	
進 学	4年制大学		短期大学		専門学校等		合計			
	7		4		14		25			
	県内	県外	県内	県外	県内	県外	県内	県外		
	1	6	3	1	6	8	10	15		
就 職	木曾管内		県内		県外		合計			
	7		6		8		21			
未定・進学準備等							0			
卒業生数							46			
平成31年3月卒業生									(単位：人)	
進 学	4年制大学		短期大学		専門学校等		合計			
	16		4		12		32			
	県内	県外	県内	県外	県内	県外	県内	県外		
	2	14	2	2	3	9	7	25		
就 職	木曾管内		県内		県外		合計			
	7		4		11		22			
未定・進学準備等							1			
卒業生数							55			
令和2年3月卒業生									(単位：人)	
進 学	4年制大学		短期大学		専門学校等		合計			
	12		7		23		42			
	県内	県外	県内	県外	県内	県外	県内	県外		
	1	11	3	4	5	18	9	33		
就 職	木曾管内		県内		県外		合計			
	6		3		14		23			
未定・進学準備等							0			
卒業生数							65			

○進学者の割合は、長らく55%程度であったが、近年、進学志向が高まり60%程度になってきている。

○4年制大学進学希望者が年々増加してきている。

○就職は、学校の位置も関係するが、東濃・中京方面の企業へ進むことが多い。

(7) 中学校卒業生数の推計

旧第10通学区中学校卒業生数の予測（県「実施方針」より）							
（単位：人）							
	H29年 2017年	H30年 2018年	H31年 2019年	R2年 2020年	R3年 2021年	R4年 2022年	R5年 2023年
郡内中学校 卒業生数	210	214	203	213	207	191	198
	R6年 2024年	R7年 2025年	R8年 2026年	R9年 2027年	R10年 2028年	R11年 2029年	R12年 2030年
郡内中学校 卒業生数	171	196	184	171	165	170	155

- 年により増減はあるが令和7年(2025年)までは200名近い卒業生数で推移し、令和9年(2027年)以降は180名を割る卒業生数まで減る。
生徒数の減少は避けられない状況になっていくと予測される。

(8) 高校の現状と課題について

木曾郡は長野県の西南部に位置し、南北に約90キロ、東西約50キロと広大な面積を有しており、木曾青峰高校と蘇南高校とは距離にして36km、移動のための所要時間は自動車ですら約50分という地理的關係にある。

また、地域に隣接する塩尻・松本地域、伊那地域及び岐阜県東濃地域との社会、経済及び文化活動等の広域化も進んでいる現状を踏まえ、木曾地域の特色ある学びの場の確保が一層求められている。

①木曾青峰高校

全日制と定時制2課程を持ち、昭和57年に木曾西高校と木曾東高校が統合し設立された木曾高校と、明治34年に設立された伝統ある木曾山林高校の流れをくむ普職併設の学科構成となっており、2課程4学科という多様性が特色となっている。

そのため、国公立をはじめとする大学進学から地元就職まで広い進路ニーズが存在し、これに対応したカリキュラムが構成されており、さらに時代の要請に応えるべく主体的で探究的な学びを各所に組み込む工夫がされている。

令和元年度に「高度な産業教育を推進する高校」として研究校の指定を受けた。

課題は、志願倍率が1.0倍を超えることが厳しい状況となっていること、国公立大学進学者の割合が減っていること、卒業後の地元産業人の育成が急務である点などがあげられる。

一方で木曾郡外からの生徒募集も進めたいが寮や下宿の整備など課題が多く、課題解決には地元の支援が必要である。

今回の研究校の指定を学校改革の起点と位置づけ、新しい魅力づくりを進め、

入学者数の維持・拡大を図り、さらに新しい意識を持った地元産業人を輩出することで、木曾地域の課題に寄与するという一連の流れを作り出していく必要がある。

②蘇南高校

木曾谷南部の後期中等教育の空白を埋めるために昭和 28 年に組合立として創立された学校であるが、昭和 50 年代からの木曾地域の中学校卒業生数の減少に、普通科の学級減という形で対応してきた。

しかし、3 学科 3 学級から 1 学級を減じる際、従前の普通科・商業科・電気科の特長を残すために、文理・経営ビジネス・ものづくり系列を置く総合学科へと転換した（平成 21 年度）。転換当初は、キャリア教育・探究的な活動・幅広い科目選択等を特徴とする総合学科の理念が地元中学校や地域に十分に理解されず、入学者数は減少の一途をたどり、第 1 期高校再編時の再編基準に抵触し統廃合の危機に瀕したこともあった。

しかし、多様な生徒にあわせた丁寧な進学・就職の進路実現や、地域と連携した「探究的な学び」の推進が、次第に認められるようになり、総合学科の設置から 8 年ほどを経過した頃から入学者数が漸増し、現在は再編基準の 160 人を超える全校生徒数となっている。

部活動の中には全国大会に連続して出場している部もある一方で、少子化の進行により部活動のあり方には課題も生じている。

（9）県教育委員会実施方針より

県が示した「高校改革～夢に挑戦する学び～実施方針（平成 30 年 9 月）」では、木曾地域（旧第 10 通学区）における再編計画の方向性を次のように示している。

○旧第 10 通学区 再編計画の方向

- ・この地区の今後の少子化の進行を考えると、学校規模の縮小を見据えた地域全体の高校の将来像について検討を進め、中学生の期待に応える学びの場を確保していく観点から、地域の合意形成を図っていく必要がある。
- ・木曾青峰高校は募集定員 160 人で、普通科、理数科、森林環境科及びインテリア科が各 1 学級となっており、また、蘇南高校は募集定員 80 人で、総合学科 2 学級となっている。少子化が進行する中、どのような学びの場を構成していくか慎重な検討が必要である。
- ・これらの観点を踏まえ、普通科と専門学科のバランスを考慮しながら、地域と密着した学びを強みとする中山間地存立校を配置していくことが考えられる。

2 木曾地域の高校の将来像に向けた意見・提案

以下に「高校改革～夢に挑戦する学び～実施方針」を受け、多くの関係者からの意見聴取等を経て、本協議会でまとめた意見・提案をします。

2021年3月に策定される「再編・整備計画」に多くの提案が反映され、木曾地域の核となる高校教育のさらなる充実が図られることを望みます。

(1) 木曾地域に望まれる「学びのあり方」について

実施方針に示された「新たな学び」の方向は、これからの時代にあった大切な方向であると考えます。

木曾地域においては、都市部の高校と異なり、限定された数の高校が多様な生徒を受け入れ、多様なキャリア実現を支援する必要があります。そのため他地域の高校以上に個別最適化された学びの実現が求められます。

また、高校の学びの機会によって、日常生活からは見えにくい地域の大人たちの活躍を生徒が認識し、自分も地域の大人たちの努力の輪に参画しようとする意識を育むことが必要です。そのために生徒が地域の産業や文化を深く学ぶとともに地域の課題や魅力を発見し、その解決や発信に仲間や地域の大人などと協働しながら主体的にかかわるような「探究的な学び」が求められます。

このように学びの質を高めていくことで、木曾谷で育った人材がこの地域を支えとともに、日本や世界で活躍していくことを願っています。

その学びの充実にあたり以下のような取り組みを望みます。

なお、内容によっては既に各高校において取り組まれていることもありますが、さらなる充実に向け木曾地域全体で取り組んでいかなければならないと考えます。

- ① 木曾地域の高校2校においては、各学年2～4クラスという比較的小規模な学校規模を生かし、「総合的な探究の時間」「信州学」などにおいて、地域と連携した課題解決型学習の形で「探究的な学び」を推進し、この木曾地域から未来の地域社会のモデルとなりうるようなビジョンを創造していく。併せて、そうした「探究的な学び」を生徒が仲間や地域の大人などと協働して進めることで、生徒が高校卒業後に地域・日本・世界で活躍するためのコミュニケーション能力及び深い思考力と判断力を育んでいく。
- ② 木曾地域の高校2校においては、木曾地域にある専門機関（林業大学校、技術専門校、看護専門学校など）との連携を密にするとともに、地域産業との連携の輪を広げ、実践的な学びの充実を図る。

なお、地域の産業界では高校教育と連携した取り組みを強く望んでおり、

多くの協力を得ることが期待できる。

- ③ 木曾地域の高校は2校しかないため、入学する生徒の学力（広い意味での学力）の幅が大きく、志望する専門性や進路もきわめて多様である。

それぞれの生徒の学びを充実させるために、キャリア学習をより一層丁寧に進めるとともに、多元的なカリキュラム、習熟度別学習、ICTの活用などによる個別学習など、さらなる少人数学習・個別最適化学習ができる環境づくりが必要である。

- ④ 大学進学を目指す生徒の一部は、進学実績の高い環境を求めて木曾郡外の高校へ進学している。大学進学を目指す生徒のニーズに対応するため学びの場の一層の充実を図ることが望まれる。

- ⑤ 木曾青峰高校の専門学科においては、当地域の特徴を活かしたカリキュラムや授業を充実し、全国に魅力を発信することにより、全国から生徒が集まってくるような特色ある専門学科を構築していく必要がある。

また、そのような教育を充実するため、専門知識のある教員の配置は欠かせない。

- ⑥ 総合学科である蘇南高校においては、入学後に自分のキャリアデザインを行い、それに合わせた多様な学びを実現していくため、キャリア教育の一層の深化が図られるよう、教員定数の拡充と地域との連携のさらなる強化が望まれる。

(2) 木曾地域の魅力ある「高校の姿」について

協議会では、現在の2校が様々な課題を抱えつつも木曾地域にとってかけがえのない学びの場であるとの共通理解の下、地域一丸となって魅力ある高校づくりに向け取り組んでいくことの必要性を確認しました。

県内どこの地域に住んでいる生徒も自宅から通学できる範囲で、高校や学科を選択できる権利があると思います。特に、旧第10通学区は岐阜県と接しており、蘇南高校の創立経緯や現在も蘇南高校の運営に対し地域が財政面を含め多大な支援を行っている点を踏まえ、県境に位置する地域において県が引き続き後期中等教育の機会を確保することは当然の責務と考えます。

したがって、将来、生徒数が減少することが予測されますが、面積が広大で公共交通機関の利便性の悪い木曾地域に暮らす生徒も、教育を受ける機会が平等に保障されるべきと考えます。

また、木曾地域の将来を見据えたとき、子どもたちは高校までは地元で過ごし、その後も自ら選択して地元に残ることや、いったん地元を離れても将来的に戻ってくるのが欠かせないことであり、現在の学びの場を存続させることが不可欠です。

そこで、「多様な学び」及び「環境の整備」等に関わって、以下のような取り組みを望みます。

- ① 学びの場の保障という観点から2校の存続は絶対の条件となる。このことは、県教育委員会の施策による支援、小・中・高校それぞれにおける学びの質を高める努力、地域の協力によって十分実現できるものとする。
- ② 現在の募集定員（郡内2校を合わせて240名）が今後の少子化の中で実態に合わない状況にあることは確かである。学力や進路希望、発達段階の異なる生徒に対し教育機会を確保し、今後も生徒数減少が見込まれる中山間地存立校が多様な学びをきめ細かく提供するために、少人数学級編制などについて検討していくことが必要である。
- ③ 木曾青峰高校においては、専門学科が募集定員の半数を占めており、生徒、保護者の意向に沿った学科配置になっていない状況がある。
全県においては普通科と専門学科の募集定員比率が7：3程度であることから、木曾青峰高校においても普通科の募集定員が専門学科の募集定員よりも多くなる方向で検討することが望まれる。
- ④ 入学生徒の実態が多様であることから、木曾青峰高校においてもコース別学習の人数を流動的に対応できるようにし、各コースの生徒の実態に応じた教育の充実を図ることができるようにすることが望まれる。
また、専門学科においては、地域の産業と連携強化を図れるよう、流動的なコース設定ができるようにすることも必要である。
- ⑤ 特色ある教育を充実することにより、郡外、県外からの入学希望者を増やす方策を考えるとともに、それらの生徒を受け入れるための寮や下宿の整備等を充実することが望まれる。
- ⑥ 教育環境の基礎となる学習環境（校舎、設備など）の整備を図ることは重要である。その際、生徒の力を活用するなど、学校環境整備に生徒が主体的に関われることを考えたい。このことは、探究的な学びの実践の場と

もなる。

また、ICT機器、Wi-Fi環境のより一層の充実が望まれる。このことが、障がい等がある生徒への支援や定時制の学びの充実のためにも活用されることが大切である。

- ⑦ 郡内中学生が郡内の高校を選択するよう、早い段階から中学生に対して高校の魅力（特徴）や生徒の活動状況等について知る機会を多面的に提供するとともに、高校生と中学生が協働して学ぶ機会をつくる必要がある。
- ⑧ 部活動については、2校が連携し合同で活動することも取り入れ、合同チームでの大会参加を検討していく必要がある。
- ⑨ 定時制については、現在も様々なニーズの生徒に対応し多くの成果を上げていることから、存続していくことが望ましい。

おわりに

木曽地域の高校の将来像を考える協議会では、木曽の子どもたちの個性を大切にしつつ、木曽から世界に羽ばたき、また、木曽で輝ける人が育っていくことへの期待と、そのために必要な地域の2つの高校の発展を願い、議論を進めてきました。

日本の社会において先例のない超少子化社会の到来を迎えた木曽地域は、いわば日本の先進事例地域となっているのかもしれませんが。従って対応についての前例はなく、全ての取り組みを手探りで実践していくほかはありません。

協議会では、子どもの人数が減少しても、木曽地域を担う人材を育成していくことは永遠に課せられた責務であり、その一翼を担う県立高校の存在は欠かせないものであるという認識を共有することができました。また、木曽地域の高校2校は「小さくてもキラリと光る高校」になり、木曽地域においてすぐれた高校教育を創造していくことが十分に可能であると考えます。

今後は、県教育委員会が中心となり、高校改革の情報を地域と共有し、地域住民や地元企業等と協議を重ね、木曽地域の意向を十分に踏まえた高校改革を進めていただくことを強く望みます。

〈資料〉

I 木曾地域の高校の将来像を考える協議会 設置要綱

(設置目的)

第1条 この協議会は、木曾地域の将来を見据えた高校の学びのあり方と具体的な高校の配置について、長野県教育委員会（以下「県教委」という。）に対して意見及び提案をすることを目的として設置する。なお、意見及び提案の検討にあたっては、県教委が2018年9月に策定した「高校改革 ～夢に挑戦する学び～ 実施方針」に基づくこととする。

(委員)

第2条 この協議会の委員は、町村長及び町村教育長、産業界から選出する者、学校関係者、PTA関係者、その他地域の実情に応じた者のうちから、木曾広域連合長たる木曾町長が20名以内を選出する。委員が欠けたとき、木曾町長は速やかに後任を選出する。

(任期)

第3条 この協議会の委員の任期は、協議会の設置目的を終えるまでの期間とする。

ただし、委員が就任時の所属機関・団体の役職を離れたときは、その後任者が前任者の残任期間を務めるものとする。

(役員)

第4条 この協議会に会長1名、副会長2名を置き、委員が互選する。

2 会長は、会務を総理する。

3 副会長は、会長を補佐し、会長に事故あるときはその職務を代理する。

(会議)

第5条 この協議会は、会長が招集する。

2 会議は公開とする。ただし、会長の判断により一部非公開とすることができる。

(幹事会)

第6条 協議会における協議内容の検討や連絡調整を図るため、幹事会を設置する。

2 幹事は、町村教育委員会の教育長があたる。

(事務局)

第7条 この協議会の事務局は、木曾町教育委員会、南木曾町教育委員会及び県教委の共同事務局とし、その役割分担は次の各号のとおりとする。

(1) 木曾町教育委員会・南木曾町教育委員会 日程調整及び会議の運営など協議会の運営

(2) 県教委 資料の収集、作成など協議会運営の支援

(補則)

第8条 この要綱に定めるもののほか、この協議会及び幹事会の運営に関し必要な事項は、木曾町長が別に定める。

附 則

この要綱は、平成30年12月11日から施行する。

II 協議会での検討経過

1 第1回会議

平成31年1月23日（水）

- ・「高校改革～夢に挑戦する学び～実施方針」について
- ・高校の現状について
- ・協議会の進め方、スケジュールについて

2 第2回会議

令和元年7月3日（水）

- ・保護者や団体などからの意見聴取について

3 意見聴取

日 時		場 所	参集者
8月29日（木）	14:00～	木曾町文化交流センターホール	産業界関係者 （商工会、製造業、農協、 森林組合等）9名
8月30日（金）	14:00～	木曾町文化交流センター大会議室	高校同窓会、木曾の教育 を考える会 8名
	18:00～	木曾町文化交流センター大会議室	郡内小中学校保護者 郡内小中学校長 6名
9月 6日（金）	18:00～	南木曾会館	郡内小中学校保護者 蘇南高等学校保護者 郡内小中学校長 9名
9月13日（金）	18:00～	木曾町文化交流センター大会議室	郡内小中学校保護者 郡内小中学校長 7名

4 第3回会議

令和元年12月20日（金）

- ・木曾地域における高校の学びのあり方と具体的な姿について（意見交換）
- ・今後の日程について

5 第4回会議

令和2年7月15日（水）

- ・これまでの経過について
- ・木曾地域の高校の将来像についての意見・提案書（素案）について
- ・今後の日程について

6 意見・提案書（素案）に対する住民意見募集

令和2年8月20日（木）～令和2年9月18日（金）

- ・意見書の提出件数9件

7 第5回会議

令和2年12月3日（木）

- ・意見・提案書（素案）への意見募集結果及び対応について
- ・木曾地域の高校の将来像についての意見・提案書（案）について
- ・今後の日程について

Ⅲ 協議会委員名簿

No.	氏名	選出区分	役職名	備考
1	原 久仁男	町村長	木曾広域連合長(木曾町長)	会長
2	向井 裕明	町村長	南木曾町長	
3	植原 一郎	町村教育長	郡町村教育委員会連絡協議会教育長会長	～平成 31 年 3 月
	須賀 幸弘	町村教育長	郡町村教育委員会連絡協議会教育長会長	平成 31 年 4 月～
	青木 信一	町村教育長	郡町村教育委員会連絡協議会教育長会	令和 2 年 4 月～
4	加藤 晋悟	産業界・工業	長野県建設業協会木曾支部長	～令和 2 年 3 月
	大沢 謙一	産業界・工業	長野県建設業協会木曾支部長	令和 2 年 4 月～
5	櫻井 秀夫	産業界・商業	長野県商工会連合会木曾支部長	副会長
6	高橋 徳	産業界・農業	木曾農業協同組合代表理事組合長	～令和元年4月
	田屋 万芳	産業界・農業	木曾農業協同組合代表理事組合長	令和元年 5 月～
7	野村 弘	産業界・林業	木曾官材市売協同組合理事長 " 顧問	～令和 2 年 3 月 令和 2 年 4 月～
8	横野 秀昭	学校関係者	木曾青峰高校長	～平成 31 年 3 月
	中村 宏	学校関係者	木曾青峰高校長	平成 31 年 4 月～
9	小幡 正樹	学校関係者	蘇南高校長	～令和 2 年 3 月
	小川 幸司	学校関係者	蘇南高校長	令和 2 年 4 月～
10	中野 則秋	学校関係者	小学校長会長(木祖小)	～平成 31 年 3 月
	井出 寿一	学校関係者	小学校長会長(福島小)	平成 31 年 4 月～
11	工藤 敬司	学校関係者	中学校長会長(木曾町中)	～平成 31 年 3 月
	奥原 由孝	学校関係者	中学校長会長(開田中)	平成 31 年 4 月～
12	古坂 貴幸	PTA 関係者	高校 PTA 会長(木曾青峰)	～平成 31 年 3 月
	白洲 剛	PTA 関係者	高校 PTA 会長(木曾青峰)	平成 31 年 4 月～
	粹本 忠	PTA 関係者	高校 PTA 会長(木曾青峰)	令和 2 年 4 月～
13	松原 崇文	PTA 関係者	高校 PTA 会長(蘇南)	～平成 31 年 3 月
	新谷 祐二	PTA 関係者	高校 PTA 会長(蘇南)	平成 31 年 4 月～
	小椋 一男	PTA 関係者	高校 PTA 会長(蘇南)	令和 2 年 4 月～
14	小川 節	PTA 関係者	木曾郡 PTA 連合会会長(南木曾中)	～平成 31 年 3 月
	牛丸 梓	PTA 関係者	木曾郡 PTA 連合会会長(木祖中)	平成 31 年 4 月～
	上田 浩之	PTA 関係者	木曾郡 PTA 連合会副会長(開田小) " 会長	～令和 2 年 3 月 令和 2 年 4 月～
15	荒岡 秀幸	PTA 関係者	木曾郡 PTA 連合会副会長(上松小)	令和 2 年 4 月～

16	狩戸 真理子	PTA 関係者	木曾郡 PTA 連合会副会長(日義小中)	～平成 31 年 3 月
	水野 多恵子	PTA 関係者	木曾郡 PTA 連合会副会長(大桑中)	平成 31 年 4 月～
	千村 有紀子	PTA 関係者	木曾郡 PTA 連合会副会長(福島小)	令和 2 年 4 月～
17	清水 幾代	地域の実情に応じた	地域諸教育機関代表(信州木曾看護副校)	副会長
18	増田 隆志	地域の実情に応じた	木曾地域振興局長	～平成 31 年 3 月
	中坪 成海	地域の実情に応じた	木曾地域振興局長	平成 31 年 4 月～
19	栗屋 佳洋	地域の実情に応じた	木祖村教育委員	
20	越原 啓子	地域の実情に応じた	元王滝村子ども育成会会長	

幹事会

No.	氏名	選出区分	役職名	備考
1	植原 一郎	町村教育長	上松町教育長	
2	伊藤 信男	同上	南木曾町教育長	
3	山瀬 明弘	同上	木曾町教育長	
4	青木 信一	同上	木祖村教育長	
5	栗空 敏之	同上	王滝村教育長	
6	須賀 幸弘	同上	大桑村教育長	～令和 2 年 3 月
	野知里 浩寿	同上	大桑村教育長	令和 2 年 4 月～

事務局

No.	氏名	選出区分	役職名	備考
1	上野 敏	県教委	教育主幹兼高校改革推進係長	～平成 31 年 3 月
	駒瀬 隆	県教委	教育主幹兼高校改革推進係長 高校再編推進室参事兼室長	平成 31 年 4 月～ 令和 2 年 4 月～
2	宮澤 直哉	県教委	高校改革推進係主幹指導主事	～令和 2 年 3 月
	上原 浩子	県教委	高校再編推進室主幹指導主事	令和 2 年 4 月～
3	山岸 明	県教委	高校再編推進室主任指導主事	令和 2 年 4 月～
4	松下 幸一	町村教委	南木曾町教育次長	
5	上楢 敏朗	町村教委	木曾町教育次長	～令和 2 年 3 月
	川島 茂孝	町村教委	木曾町教育次長	令和 2 年 4 月～
6	中野 則秋	町村教委	木曾町教育委員会指導主事	平成 31 年 4 月～